

水稻・麦・大豆栽培情報 7月号

平成27年 7月 1日
J A 柳 川
南筑後普及指導センター

【水稻】

1 麦わらすき込みほ場の水管理

麦わらをすき込んだほ場では、ガスが発生し生育障害を起こす恐れがあります。ガスが発生した場合は、すみやかに落水し、ガス抜きを行います。それでもガスが発生する場合は、間断灌水を行ってガス抜きを確実に行ってください。

2 雑草防除

田植え後の除草剤を使用しても、ヒエが残った場合はクリンチャー1キロ粒剤を、広葉雑草が残った場合はバサグラン粒剤を、両方が残った場合はハイカット1キロ粒剤、又はクリンチャーバスME液剤を下記の要領で散布します。

雑草の種類	使用する農薬	使用量 (10a 当り)	使用時期	収穫前日数
イネ科雑草	クリンチャー 1キロ粒剤	1kg (湛水処理)	移植後7日～ ノビエ4葉期	30日前 まで
		1.5kg (湛水処理)	移植後25日～ ノビエ5葉期	30日前 まで
広葉雑草	バサグラン粒 剤	3～4kg (落水処理)	移植後15～40日	60日前 まで
イネ科・広葉 雑草	ハイカット 1キロ粒剤	1kg (湛水処理)	移植後15日～ ノビエ3.5葉期 (効果発現まで2～3週間要 す)	60日前 まで
	クリンチャー バスME液剤	1000ml (水70～100L) (落水処理)	移植後15日～ ノビエ5葉期	50日前 まで

3 中干し

株当たり茎数が20本程度になったら、中干しを開始します。中干しは無効分けつの抑制や倒伏防止のため、必ず実施します。中干し時期の目安は「夢つくし」で7月15～20日頃、「元気つくし」で7月20～25日頃、「ヒノヒカリ」、「ヒヨクモチ」では7月25～30日頃となります。遅れないように実施してください。

【大豆】

1 播種

播種期	7月5日～20日 (適期播種)	7月21日～ (遅播き)
株間 (cm)	30～20	15～10
10a当り 播種量(kg)	3～5	6～9

※1株2粒の場合

※播種深度は3cm程度の深さを基本に土壌の水分状態に応じて調整します。(土壌が乾燥している場合は5～6cm程度の深さにします。)

2 雑草防除

播種後出芽前まで(雑草発生前)に、液剤の場合はラクサー乳剤(400～600ml/水量100l/10a)、粒剤の場合はラクサー粒剤(4～6kg/10a)を散布し、雑草の発生を防止します。

播種後、除草剤を使用する時に、覆土が不十分な場合や、土塊(クレ)が大きい場合、あるいは散布前後にまとまった降雨に見舞われた場合は、薬害により、大豆の出芽が抑制されることがあります。除草剤が散布できる条件を整えて、効果的に実施してください。

3 中耕・培土

本葉2～4枚の頃(播種15～30日後)までに、必ず1回は実施します。生育の促進や、排水性の向上、倒伏抑制などの効果があります。

4 その他

除草剤を使用する時は、隣接するほ場に飛散しないよう十分に注意を払ってください。(最近、畦畔除草剤による事故が増加しています！)

農薬使用上の注意

- 1 散布前に必ず農薬ラベルを確認！
- 2 散布時には近隣作物や住宅街への飛散防止対策を徹底！
- 3 散布後は必ず散布器具(タンク、ホース等)を洗浄！
- 4 防除履歴の正確な記帳！

J A 御中
(営農担当部署)

福岡県米・麦・大豆づくり推進協議会

(事務局：JA全農ふくれん 営農企画課)

(公印省略)

営農情報 6

《イネいもち病対策を行いましょう！》

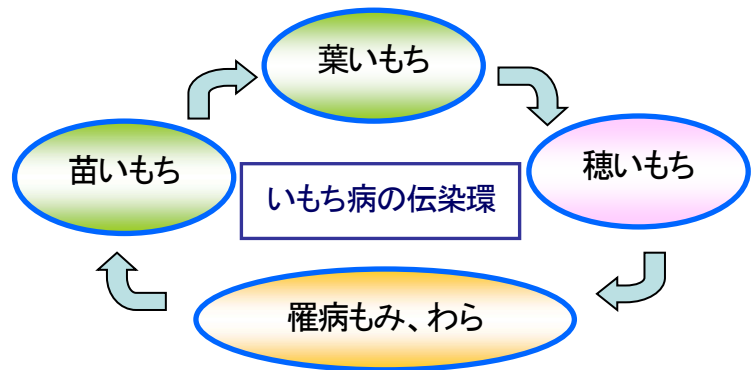
現在、水稻の生育は順調ですが、県北を中心に県内各地でいもち病が発生しています。今後の天候次第では、急激に広がる可能性があるため、以下の点に注意して、いもち病の発生が見られたら、直ちに防除を行いましょう。

1 いもち病の生態

いもち病の伝染環は右図のとおりで、罹病もみから伝染し、感染苗を経て本田に持ち込まれ、本田での伝染源となります。苗での発病が認められない場合もありますので、苗いもちの発生がなくても安心はできません。

いもち病菌は、大量の胞子を形成して、約100m以内での飛散が多く認められ、風等の状況によっては、1kmの広範囲にまで飛散します。

葉いもちが発生した場合、早期に防除を行うことが極めて重要で、葉いもちの早期防除が穂いもちの抑制につながります。



2 対策

- (1) 置き苗（補植用苗）は重要な伝染源ですので、直ちに除去して下さい。 苗は畦畔など水田の近くに置かず、水田から離れたところに持って行って捨てて下さい。
- (2) ほ場を定期的に巡回し、葉いもちの発生がみられたら、拡大する前に速やかに防除を行って下さい。
- (3) 多肥栽培を避け、葉いもち多発時には穂肥を半量に減じ、激発時には穂肥の施用を中止します。

3 薬剤防除法

- (1) 防除薬剤は、各地の稲作暦や「福岡県病害虫防除の手引き」を参照して下さい。
- (2) 葉いもちに対する薬剤の防除効果は、発生初期は高いですが、散布時期が遅くなるほど低くなるので、発生が確認されたら直ちに防除を行いましょう。
- (3) 穂いもちは予防散布が重要で、出穂直前が防除適期です。いもち病常発地や降雨のため粉剤や液剤の散布が困難な場合には、粒剤を適切に散布して下さい。

以上